

## 【カンパウェア利用規定・同意事項】

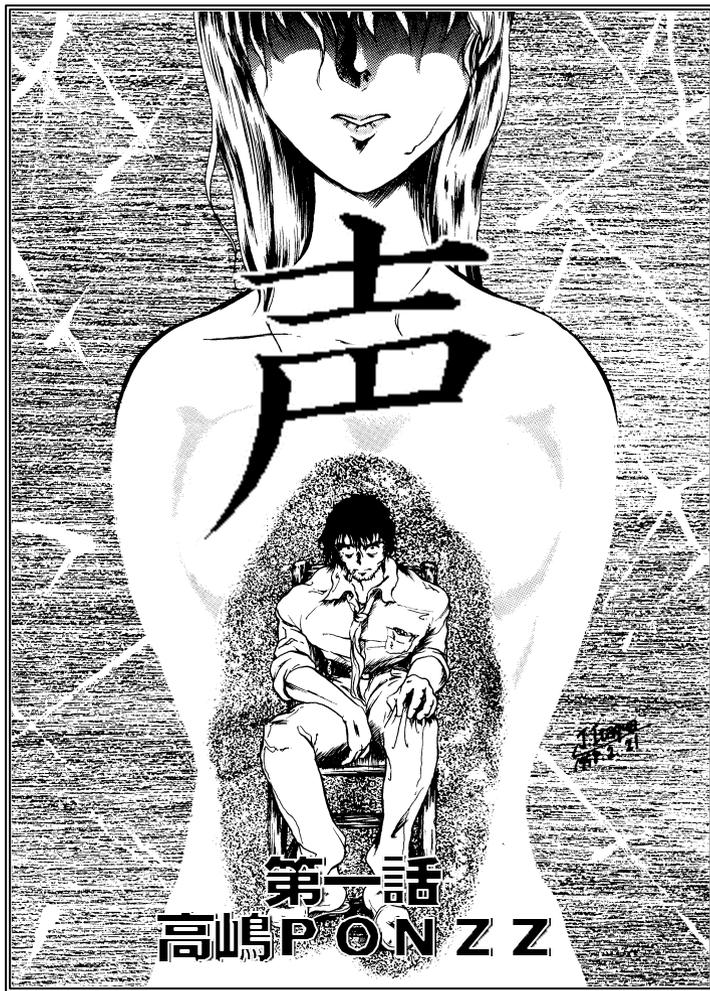
- ・当作品は「カンパウェア」です。利用者は自由に、WEB上で直接にでも、ダウンロード後にも閲覧することが出来ます。閲覧に際し、カンパは強制するものではありません。読了してみてカンパを希望する方のみカンパをお願いするものです。カンパの有無による閲覧制限はありません。
- ・カンパ希望額は一口 ¥100 で、何口でも構いません。方法は銀行振込で「店番号 = 4 0 9 東海銀行豊田東支店 無限画廊 小林道明 (トウカイギンコウトヨタヒガシシテン ムゲンガロウ コバヤシミチアキ) 普通預金 口座番号 1220503」まで希望のカンパ金額を振り込んでください。
- ・カンパしてくれた方には、おまけで非公認の短編小説やイラストなどの送信を考えていますので、読んだPDFのタイトルと振りこみに使った名義を記入した電子メールを、連絡先のメールアドレスまで送信してください(これがないと御礼が送れないのでお忘れのないように(^\_^))。郵便にての報告は、電子メールによるものと比べ、手続きに時間がかかることがありますので、できるだけ電子メールでお願いします。
- ・カンパされた金額の使用用途は、作者とサークル無限画廊の活動環境改善等の費用の一部に充てさせていただきます。
- ・個人・法人に限らず利用者は何度でも自由に閲覧することが出来ますが、著作権は放棄していません。
- ・再配布は可能ですが、商用(有償)配布への利用はこの限りではありません。また無償配布でも広告等を目的とした利用の場合には「商用配布」と見なします。商用配布の場合には別途打ち合せの上でご相談にのりますので、電子メール・郵便などで連絡をとってください。
- ・利用者はPDFファイルの内容を改変する事は出来ません。また、改変したものを配布することも禁止します。
- ・当作品を利用した事によるいかなる損害も、作者とサークル「無限画廊」は一切の責任を負いません。
- ・作者もしくはサークル「無限画廊」に著しく不利益があると判断した場合には一方的に作品の利用を中止していただくことがあります。
- ・この「利用規定」は予告なく改編・加筆を行うことがあります。

連絡先：〒446 愛知県安城市横山町下毛賀知 51-11 中根方 公園丸

e-mail : [itaqua@japan-net.ne.jp](mailto:itaqua@japan-net.ne.jp)

ホームページ:<http://www.japan-net.ne.jp/~itaqua>





第一話

高嶋PONZZ

# 声

## 第一話

高嶋PONZZ

1

無音

カチッ

ことっ……

現在一九九六年五月二〇日。

記録者、高見恭子。

そもそも私は、父の死に疑念を持っていた。父はやすやすと他人を家の中に入れてはしない。それは、自分の原稿を他人の目に触れさせないようにするためであり、また、プライベートを誰にも邪魔されたくない父の考えからでもあった。

たった一人の肉親の私すら書齋に立ち入らせない。今まで父を担当していた専任の編集者でさえ、一度も見たことのない父の仕事場である。それなのに、他人を　しかもただかだかメイドの鴉子とぎこという女を書齋にいらしていらしい。たかだかメイド、それも経験のない若い女性を中に入れたのである。奇妙なことといわざるを得ない。別にその女に嫉妬しているわけではない。父は、所詮親である前に一人の小説家であつたし、小説を書くため

に家庭を顧みなかったことをあげるまでもなく、世間的にできの悪い人間であったことを証明するに難しいことはない。だから、私は、少なからず父を嫌っているし、そんな父が女を作ったところで少しも腹を立てることはない。むしろ、私とそれだけ関わりを持たなくなることは、私にとって幸せですらある。母の死も、父にとっては些細な事件でしかなく、小説のためにはむしろ邪魔な存在であったのかもしれない。葬式の日、父は涙一つ見せず、記者会見にも応じず、ただひたすら執筆に没頭していた。

私には、たかが小説にそれだけの執念を持ち続ける父の神経が知れないし、彼の存在は得体の知れない未知の化け物に等しいものであった。

父のいなくなった家は、血で汚れた場所を清掃会社に綺麗に掃除してもらったので、家の隅々が新品のように磨かれ、輝いていた。警察が、証拠物品として様々なものを持っていったが、私には特に思い出の詰まった物など何も無かったので、警察への引渡の確認作業が煩わしかった。

ただわからないことは、清掃会社の職員も言っていたことだが、なめくじの出すぬめりのある分泌物と類似したものが床中についていたことだ。これが、一体何を意味するのか、私にもまったくわからない。だが、もしこれだけの粘液を分泌する生物がいたとするなら、その生物は一体どこから侵入して、どうやってこの家から出たのか。まったくわからない。

この家に入るための場所には、その粘液はまったく見付からなかったのも謎だ。

疑問に思った私は、そのことを警察に尋ねてみたが、警察は、これについては何も教えられなかった。警察でもこれがなかったのかわからないようで、逆に私になんのか尋ねてきたほどだ。いくら私が生物学者だからといっても、これほどの液体を分泌する地上生物など、見たことも聞いたこともない。

私は、この超常現象とも取れるような事実、最初、違和感というか、なにかにそぐわないものを感じていた。だが、同時に、その分泌物を出す生物がなんなのか興味湧いてきていたのもまた事実だった。学術的興味よりも、好奇心のほうが勝っていただろう。学術的興味なら、こんな地球上の生物の法則を無視したような化け物を認めようとは思わなはずだ。学徒としての常識が、拒絶してしまう。以上。

ブっっ

ブっっ

現在一九九六年五月二二日。

記録者、高見恭子。

粘液の幅から、推測される生物の大きさが判明した。

全長不明、全幅約二メートル、高さ二メートル以上。廊下の天井や梁にも粘液の痕跡が

あることを発見したため、そこから全高のおおよそが判断できた。痕跡の写真とそのネガを、資料Aとして保管することにする。以上。

ブっっ

ブっっ

こと……

現在一九九六年五月二四日。

記録者、高見恭子。

父の書齋に初めて入った。マホガニーの机と、壁に作りつけられた本棚がある。

本のいくつかの背表紙には、血の跡がある。

机の引き出しを調べてみると、書きかけの血がついた原稿や資料ががしまわっていた。

その中に、本が一冊だけあった。厚さは、約二センチ。本の題名は掠れて判読できないが、アと恐怖だけが読める。著者名は不明、訳者が逸見勇とある。表紙にタイトルはない。紺色の布が張られたハードカバーで、四六版。手垢がかなり付いている。父にしては珍しく、かなり乱雑な取扱いだ。古本屋で手に入れたのだろう。資料Bとして保管する。以上。

ブっっ

ブっっ

記録開始時間、記録者共に同じ。

資料Bを読み進めていくと、それは、反道徳的な言葉と内容に彩られた詩で埋め尽くされていた。人間の尊厳を徹底的におとしめ、世界を泡沫としてしまつような、忌まわしく強大な神とその従者への賛美にあふれている。

あるページに枝折しきりが挟まれていた。そのページの詩を記録することにする。

魔王よ、魔王よ

この世の始まりを見た偉大なる魔王よ

玉座にてのたうつ悲しき魔王よ

混沌のすべてを司る高貴なる魔王よ

従者のフルートはどうしてあなたの苦しみを拭ぬぐえよう

魔王よ、魔王よ

あなたの苦しみは

愚行なる人間たちをあなたのもとに呼ぶことでこそ

永久に癒いよされるだろうに

父は、なぜこの詩に注目したのだろうか。この詩に、どれ程の意味が隠されているのだろうか。以上。

ブっっ

ブっっ

現在一九九六年五月二八日。

記録者、高見恭子。

資料Bを完全に読み終えた。

この叙事詩を中心に編纂された詩集は、アザトースと呼ばれる神とその従者への賛美、賞賛に溢れたものであることがわかった。

アザトースとは、この世　宇宙すべてを作り出した神であったが、別の勢力の神によって全能の英知を剥奪され、白痴の魔王になったとある。現在、その魔王は玉座にて永劫の苦しみにのたうち、過去の比類なき英知を思い出すこともできないまま、アザトースの忌まわしき従者たちの奏でる、おぞけもはしるような音色に包まれ、今も時空の彼方で息衝いているという。彼の従者は、数限りなく存在し、それぞれがフルートを持ち、それで魔王を慰めているようだ。

アザトースには、対立する神が存在するとされ、その神はヨグソトースとされている。なぜ対立しているのかは不明。ヨグソトースは大きな光の塊で、様々な色に輝き、大きさは約百メートル程度から、いきなり二キロ弱にまで変化し、複数に分裂、集合を繰り返すらしい。

しかし、この本の内容と父の執筆中だった小説との間には、まったく関連性がない。では、資料Bが机の引き出しにしまわれていたのは、何故なのだろうか。以上。

ブっっ

ブっっ

現在一九九六年五月二九日。

記録者、高見恭子。

資料Bに示されていた神について調べてみると、それはクトゥルー神話と呼ばれる神話に登場する一柱であることが判明した。ここでは、その神話について言及しないが、アメリカのアーカムという街にあるミスカトニック大学に、神話についての資料が豊富に揃っているらしい。以上。

ブっっ

ブっっ

現在一九九六年六月二日。

記録者、高見恭子。

事件前の父の足取りが判明した。父は、一度古美術店に訪れ、フルートを窃盗<sup>せつとう</sup>。つまり、万引きしたらしい。なぜ、フルートを万引きしたのだろうか。

父は、この後、五月二日の一度しか外出していない。メイドの春江を解雇、新しいメイドを雇うために街に出たときだ。その時、鶉子という二十歳の女性をメイドとして雇っている。つまり、フルートがこの家に運ばれたときから、一度しかここから出ていないことになる。

しかし、警察は家にフルートなどなかったと言っている。警察は、古美術店の経営者を犯人として検挙したらしい。勘でしかないが、おそらく、犯人ではないだろう。

フルートはどこにあるのだろうか。気になる。以上。

ブっっ

ブっっ

現在一九九六年六月十日。

記録者、高見恭子。

昨日、脅迫電話がかかってきた。即刻父の死の原因の調査を止めること、さもなければ

死よりも恐ろしい目にあう、とのこと。電話の主は二十代の男性。名前は名乗らなかつた。

念の為警察に電話したものの、まったく取り合ってくれない。警備会社に身辺警護を依頼することにしたが、手痛い出費になりそうだ。あの謎の生物の調査と父の死の原因を調べ、るためには仕方がないと諦めることにしよう。死ぬよりはましだ。

ブっっ

ブっっ

現在一九九六年六月十一日。

記録者、高見恭子。

一昨日に続いて、昨日も同人物から電話がかかる。今度は、脅迫ではなく忠告のようだ。どうやら、電話の主は私が調べている生物の正体がなんなのかわかっていているらしい。父がどうなったのかも知っていると考えてよさそうだ。これからどうするべきか。とりあえず身辺警護の依頼を取り下げることにする。以上。

ブっっ

ブっっ

現在一九九六年六月十四日。

記録者、高見恭子。

ここしばらく、研究のため大学に泊まっていた。自宅に帰ってみると、隣に住んでいる会社員から小包を手渡された。郵送されたもので、差出人は不明。誘惑にかられ、小包を開けてみると金色のフルートが入っていた。門外漢の私ですらも、天才の一品と感じさせるほどの素晴らしいフルートだ。これが、父が盗んできたフルートなのだろうか。なぜ私に送られたのだろうか。送り主は誰か。そもそも、このフルートはなんなのか。これらの疑問が解決されない限り、このフルートを軽々しく扱うべきではないだろう。明日、楽器に詳しい小畑教授に見せてみることにする。以上。

ブツ

古びた事務所らしき部屋は、日の当たりも悪くじめじめとした湿気が充満していた。書類を乱雑に挟んでいるスクラップブックが、安物の本棚にすらりと並び、その上にもさらにスクラップブックが積み上げられている。木製の使い込まれた机の上は、ここ一週間の地方新聞と全国新聞が積み上げられ、資料の整理が行われるのを今か今かと待っている。事務所にある物の中で、この机だけが、この事務所の持ち主が大切に扱っている。そうは見えないかもしれないが、代物であった。それは、机の上に山積している資料の透き間から見える天板や、机の側面、背面を見れば明らかだった。不自然なほど、艶が出て

いるのだ。おそらく、暇を見付けては常に磨いているのだろう。

「これでA面終了です」

若い男は、茶色い合成レザーの安っぽい椅子にすわって、硝子のテーブルに置いたマイク口カセットレコーダーから、テープを取り出した。そのレコーダーは、ずいぶん使われてきたらしく、レコーダーのカバーがかすれて皺だらけになっている。再生と録音スイッチが新しいのは、修理に出したとき交換されてきたからだ。

男は、大学生らしいカジジュアルルックに身を包み、左腕には流行の時計がまかれている。『吐いて捨てるほどいるような一般的な大学生』と自称している通り、きわめて累計的なルックスをしていた。少なくとも、外見だけをとってみれば、実に凡庸な男である。半田大祐、という名前だけが非凡だった。

むかひに座っている男は、しょぼくれた男で、年がら年中シケモクをくわえているような貧相な男であった。時々毛抜きで抜いている顎鬚には抜き残しがあり、疎らに長い髭が伸びていてそれがさらに男のだからがなさを強調している。おおよしい男ではなく、ヒッピーや浮浪者と間違われるのがおちな奴だ。一日に一回必ず風呂に入っているのが、彼の唯一の美点かもしれないが、それも鼻のあたりにまで伸びた長い髪の毛が、それをみごとに台無しにしている。まあ、真つ当な人間ではないだろう。



彼がこの事務所の持ち主、早芝弘光<sup>はやしばひろみつ</sup>である。おおよそ売れない探偵で、時流から乗り遅れた探偵事務所を開いている。

たった一人で探偵事務所を切り盛りするのは現在において愚の骨頂だ。

最近の探偵の主な仕事である、素行調査　会社の社員に対する監視や、浮気調査などのことだ　では、メインに行われるのが尾行である。

ところが、この尾行というのは、単独で行うのではなく、常に複数が連絡を取り合い、入れ替わりでおこなわれるものだ。決して単独でできるものではない。都市の雑踏<sup>まじまじ</sup>に紛れては、どのような目を持ってしても簡単に撒かれてしまう。

つまり、たった一人で探偵を営むということは、ごく普通の探偵が依頼を受けるような素行調査が、全くできないことを意味する。昔の探偵小説のように、難事件を次々と解決するなどという、極めて小説的なことを生業<sup>なりわい</sup>としているわけでもない。

早芝探偵は、企業内スパイの発見を行う、カウンタースパイとでも言うようなことを仕事にしているのである。こうしたスパイ捜査は、直接的な素行調査ではなく、スパイの残した痕跡を調査すればいい。簡単にはいかない仕事だし、スパイの発見率はかなり低い。それでも、こうした依頼は一人でもなんとかなるものだ。どうせ、報酬は表に公表できないカネなのだ。経理がずさんでも、どうにでもなった。

しかし、現在の日本の企業は、そうした産業スパイに対しては独自の自衛のシステムを供えている。探偵を雇うよりも確実に安くつくからだ。だから、そうした本業の分野でさえ、彼は飯の種に事欠く始末であった。

「フルート、ねえ。高見伸治てえの、いつだったか変質者に殺されたって小説家たる」  
 囁れた声だ。長い間訊くのは辛いほどかすれて、だみ声になっている。決して生来からのものではないことは想像に難くなく、何十年も競り市で競りをしている人間のそのように、あまり好まれるものではない。

「ええ」

「B面にかえてくれ」

半田青年は、小さく頷くと使い慣れたマイクロカセットレコーダーを操り、カセットを裏返しに入れて再生した。

早芝探偵は、シケモクに火をつけて深く煙を肺に吸い込んだ。ヤニの味がした。

無音

カチッ

ごとっ……

現在一九九六年六月二〇日。

記録者、高見恭子。

小畑教授によると、このフルートは、数世紀前、精密な管楽器が世に出る前に、一度ルーマニアでみかけられたものだという。以来、幾度か歴史の表舞台に顔を覗かせていたが、持ち主は必ず謎の失踪を遂げているという、いわくのある品なのだそうだ。眉唾物で、教授自身信じていなかったそうだが、目の前にこうして実在するのを見てみると、どうやら管楽器の歴史が大幅に塗り替えられそうだとのこと。教授からフルートを譲ってほしいと言われたが、この調査が終わらない限り譲ることはできない。以上。

ブっっ

ブっっ

現在一九九六年六月二二日。

記録者、高見恭子。

小畑教授が、あのフルートを譲ってくれと執拗に迫ってくる。このままフルートを持ち続けても、なにもわからないので、小畑教授に渡してしまおうかと思っている。それで、父の死の謎がとけるのなら安いものだ。以上。

カチッ

「これだけか」

つまらなさそうにシケモクを灰皿へ押し付け、椅子の背もたれに体を預けた。椅子は、乱暴な扱いに大きくぎいと軋みを上げて不満をもらした。

「これで終わりです。この日　六月二二日を最後に、高見教授は失踪しています。小畑教授も、しつこいぐらいに譲ってくれるよう言ったらいいんですけど、二二日に会って以来一回も顔を合せてないそうです」

「それで、俺に教授の消息を調べてほしいというわけなんだな？」

「ええ、そうです。やってくれますか？」

「かなり高くつくぞ。おまえみたいな大学生のボンボンに払えるとも思えんな」

さつき消したばかりのシケモクをまた拾ってくわえ、火を付ける。もう何センチも残っていない。貧困に窮きんしているわけではなく、単にけちなだけだ。

「ここに前金で五十万あります」

半田は、懐ぶくろから五十万の札束を出した。

早芝の眉がびくんと動く。

「教授を見付けてくれたら、三倍の百五十万をお支払いしましょう。期限は問いません。発見までの期間が短ければ、これ以上の金額をさしあげます」

とうてい大学生に工面こうめんできるような金額ではない。しかし、この大学生は、あっさりとはんと千円札でも寄付するような自然な感じで差し出してきた。このカネをどう作ったかは、差し当たっての問題ではない。厳然として目の前にカネがあるのは事実だし、依頼を引き受ければそれはそのまま自分の懐に入り込むのだ。

「引き受けた。一応、この書類にサインしてくれ」

細々とした契約事項が書かれた紙と、契約書類、それにボールペン、朱肉をまとめて男の前に出した。

彼には、これだけの金額を目の前にして、お前みたいな若い奴から仕事は受けない、などと切り切れるほどのプライドを持っていない。

最初は高かったプライドも、泥をすすするような困窮きんきゆうした日々を過ごしていくうちに、僅わずかかずつ磨り減らしてきた。生きていくためには、なによりカネが必要だ。彼が普段請負うスパイ捜査とは全く違う仕事で、慣れないこともあるだろう。だが、生きていくためにもこの仕事は絶対に解決する必要がある。

それに、若い大学生に依頼されたこの仕事には、彼の謎を解く欲望をそらせるものがあった。この事件には、小説等の空想と同じような、ある種の危険があると肌で感じとっていた。彼流の言い方でいえば、匂い　とでもいっただろうか。脳の嗅覚で感じ取れるの

だ。皮膚感覚とでも言おうか、センスの問題かもしれない。

さらさらと項目に字を埋めていく大学生を見て、早芝は現在進行しているだろう事件に警察よりも早く着手するだろうことを実感していた。警察を出し抜いたのだ。心の中で、僅かばかりの喝采かっさいを上げる。

それにしてもである。この事件がどのような裏があるのかわからないが、自分のような場末の探偵に捜査を依頼するのだから、普通にはないなにかしら危険な匂いのある事件であるように思えた。

「ひとつ訊いとくが、このテープはどうやって手に入れた」

「答える必要は？」

「ある」

遂しゆ巡くわんせずじゆんに答えた。

「その、それは……」半田青年は、ためらいがちに少し口ごもった後、意を決して言葉にした。「俺、あの人とききました」

「高見恭子は何歳なんだ」

「二九歳です」

あらかじめ渡されていた写真の彼女は、かなり若く見えた。早芝探偵は、テーブルにお

いてある写真を手に取り、まじまじと見る。

半田青年によれば、その写真は、去年の秋、海に二人だけで遊びに行った時に撮ったものらしい。夕暮れの岩場の海岸で、岩に体を預けて、にっこりと微笑んでいるジーンズの女性がつつっていた。闊達かったくで行動的な印象がある。靴はそれを表すかのように、トレッキングブーツだった。風に揺れているだろう、少し乱れた髪はセミロングで、言われればようやくわかるような焦げ茶色。眼鏡をかけているが、勤勉そうな雰囲気はない。行動派を感じさせるわりには、瞳の輝きにはインテリジェンスを感じさせる輝きがあり、それがエキセントリックな魅力を彼女から引き出していた。プロポーションは、控え目になりきれない程度のグラマー。世間で言われるところのインテリジェンスビューティーからは少しかけ離れた、アクティブビューティーとも取れる匂いが漂う。

外見年齢は、おおよそ二四、五歳というところだろう。肉体的な年齢も、膚はだの色艶いろでんからしてその程度のはずだ。

もつとも、早芝は探偵である。年齢の推測くらいなら簡単にできる。予想通りの年齢であつたことに、ひとしきり満足する。

「それがなにか」

「いや、なんでもない。それで、このテープは？」

「恭子さんのマンションから持ってきました。恭子さん、大事なことはテープに録音しておくのを知ってましたから」

「ひょっとしたら、失踪の謎も含まれてるんじゃないか。つまりは、そう思ったわけだ」  
小さくうなずく。

「普通の奴等じゃあ、そんなふうには考えつかん。よく思い付いた。少しは頭の使い方をわかっている。いい傾向だ」

「ありがとうございます」

半ば気のない返事をかえす。

「推理通り、失踪の鍵はあった。誘拐だとしたら、小畑教授ではないな。小畑教授は、恐らくフルートを手にいれるためになんでもしようとするだろう。ところが、高見教授はフルートを小畑教授に渡すことを臭わせている。誘拐したとしても、フルートを譲ってくれることを知れば、すぐにも解放するだろう。電話をかけてきた男だが、こいつも違う。警告する男が、その相手を誘拐するものか。安全な場所に教授を移すなら、なにかしらの手掛かりを誰か。それこそ、半田君にでも教えているはずだ。つまり、電話の男でもない。全く別の原因で、第三者に誘拐されたことも考えられるが、この可能性は削除しておく。失踪の可能性が一番高いな。大学の教授の部屋には自由に入れるか？」

「いえ。鍵がかかってますから」

「なら、これから自宅にむかうが、すまないが鍵を貸してくれ」

「僕もいきまず」

半田は、ゆっくりと椅子からはなれた。おとなしく振る舞ってこそいるが、自分が今なにをするべきなのかわからないまま途方にくれ、いらついていた。それが、この探偵が行うべき行為を指示した途端、表に出さず、じつと息を潜めていた焦燥感が一気にふきだし、熱い衝動となって、彼を感情　怒りの虜こいつにしてしまう。

普段、表立って怒ることを知らない分、その感情はなにも勝るものとして彼の心を隅々まで支配し尽くす。心は抵抗できないのだ。赤く、くつくつと煮えたぎる溶岩のような感情。目の前が血の色に染まってしまいそんな幻覚さえも感じる。

早芝は、そんな半田にはれないようにふんと鼻で笑った。しかし、その次の瞬間、嘲あざわらりに歪んだ唇が凍り付き、がたがたと全身が震え出した。

殺しちまえ。

一人の女が行方不明になっただけではないか。俺には関係ないことだ。いっそのこと、この場でこいつを殺しちまって、カネをぶんどっちまえはいい。

殺しちまえ。

早芝は頭を振った。脳髓に鷲のごとく絡み付いた暗く這い寄る声が、自分を自分でなくしてしまふ。別の人間にすり替えようと、ひっそりと脳の神経繊維の一つ一つを浸蝕していくようだ。脳髓から、小脳、大脳へとスポンジに染み入る水のように行き渡っていく。腕には、やりばのない力が一杯にみなぎり、がたがたと震えさせる。

奇妙、というほかない。探偵稼業を始めて　いや、生まれてこの方、こんなおかしな考えが自分を動かそうとしたことはない。魔が差した、というものだろうか。あまりいい気分ではない。冷や汗がびっしりと全身を覆った。目に見えない、しかし形のあるいいしれない恐怖が、紙一枚の隙間のある事務所の扉から滲み、床一面に広がって自分の体を占領しようとしているかのようだ。暗雲たる空気が事務所中に立ち込めている。

だめだ。

早芝は、唐突にそう思った。理由はわからない。直感が、早芝にそう思わせた。

やめておけ。

額に脂汗を浮かべ、ざりざりと歯を噛み締めて、自分に言い聞かせた。奥歯が軋みといる悲鳴を上げる。顔が赤銅色に染まり、目が充血している。

こんな事件に関わっちゃあ、絶対にいけない。この依頼はすぐに断るべきだ。契約書なんて、すぐに燃やせばいい。半田が、自分にどうしてもやらせようとするなら、ぶん殴

つても事務所から追い出せ。まだムシヨ暮らしの方が、いや死んだほうがましだ。

勝手に動き出す体を自分の元に戻そうと、必死に自分に言い聞かせる。体は、じりじりと立ち上がる素振りを見せ、主の言うことを聞くこととしない。体の主人は、早芝ではなく、得体の知れない何かであるようだ。少なくとも、彼にはそう感じられた。

立つな、立つんじゃない。さっさとこっち来え。この仕事は降りた、だ。早くだ。体が立つまえに言えばいいんだ。まだ間に合う。立つてしまえば、もう進むことしか許されなくなる。ああ、立つな。椅子に腰を沈める。そして足を組め。そうすりやたてない。冷静に考えることもできる。そうだ、別の奴に仕事を回せ。立つてもいい。電話に手を伸ばすんだ。

だが、手は電話ではなくコートを掴もうとしていた。もどかしい思いだった。自分のからだか勝手に動いている。心は、まったく違った行為を望んでいるというのに。

コートなんか掴むな。俺が掴むのは電話の受話器だ。間違えるな。ああ、やめろ、やめてくれ。俺は、関わりたくないんだ。よせ、やめろ。どうなってやがる。ああ、駄目だ、やめるんだ。

早芝の思いを無視して、手がコートを掴んだ。のろのろとした動作でコートを羽織り、壁に掛けてある事務所の鍵を手にとって、事務所からゆっくりとでていく。



半田は、探偵の後をついてきている。

早芝は、もはや自分がどうやっても高見恭子捜索の依頼を受け入れざるをえない状況になりつつあるのを感じていた。そう、運命などとは違う、はるかに偉大な意思に操られる人形のように。

2

私が意識を取り戻したのは、昼頃だろうと推測できた。窓べからさす陽の光が、昼のそのように感じられたからだ。多分、間違っではないと思う。私が、いつ、どのようにしてここに監禁されるに至ったのか、それはまるでわからない。

それでも私は分かっていた。私は助かったのだ。父の二の舞にならず、ここにいられるのだ。ここは、多分精神病院の一室なのだろう。きつとやつらも、ここまではやってこない。

いや

本当にそうだろうか。ここは、本当に大丈夫なのだろうか。考えてみれば、ここは人間の世界ではあるが、所詮 あれ 奴 と人間扱いするのおぞましい の世界の

一部なのだ。あれ が少しばかり本気になれば、たやすくここは消滅してしまうかもしれない。もしそうなら、あれ は私がどこにいても、私を追い求めてやってくるだろう。フルートを手にしたものは、あれ からは逃れることはできないはずなのだ。そう、今は異次元に住まう主に捧げる忌まわしきフルートの音を奏でているだろう、父とメイドのように。

私は、壁にもたれながらそんな事をうつらうつらと考えていた。ほんの数日前の自分ならば、そんな考えの自分を気違いと思つていたところだろう。

あれ から逃げられないのなら、弱点を探りだし、どこかに放逐する以外に方法はない。体を持っている以上、その体には弱点があるはずだ。心がある以上、弱みはあるはずだ。しかし、私にできるのだろうか。私のような、矮小な生物に、あまりに大きな力を持つ神の従者を放逐することなど。神は、幾ら白痴とはいえ、白痴なればこそ、自己防衛に対する意識はかなり過敏なはずで、そう考えれば、その神が あれ にどういつ力を貸し与えるか、わかつたものではない。

私は、自分が学者であることを後悔せずにはいられなかった。あれ に対するあらゆる対抗手段を考えても、否定的な考えしか浮かばない。もう少し知識のない人間であつたら、私はこんな考えに支配されることはなかつただろう。

このまま、精神病患者としてここに止まるのが、一番賢明な選択なのかもしれない。精神病患者を装つのは簡単だ。この数日間、体験したことすべてを、親切丁寧に説明してやればいいのだ。それだけで、私は重度の精神病患者になり、ここに止まっていられるだろう。あれ が、私の居場所に気付かぬ限りは、きつと何不自由無く生きていける。

逃げだな、と、私は思った。

知つてしまった以上、自分にできることがたとえ些細なことであっても、やるべきなのだ。今、私は、あれ がどういつ存在なのかはつきりと理解できていた。狂わなかつたのは幸運というよりも、なにかしらの必然を感じずにいられない。

あれ の名は、《忌まわしき神々の従者》。狂える主を、フルートにて慰める狂える従者。単純に気持ち悪い、としか表現できないようなその体には、知性のかけらも感じられず、我々の知るあらゆる生物の範疇から遠くかけはなれており、生物学者の私の知性を狂わせると十分足る資質を得ていた。今思い出しても、胃が痙攣して胃液を吐き出そうとするほどだ。あれ の存在について考える時、決まって脳を直接かきむしりたくなるような苛立ちに襲われる。

私の知り得るどの生物の範疇にも収まらない、不気味な体。狂気の知性をそなえた、瀟々たる瞳。耳を塞いで聞こえてくる、透き間風の音と金切り声が重なりあつたような、おぞ

けを感じさせる声。そのどれもが、狂気への扉となりえる。そうした要素の集合体。

あれ は、そうした存在であった。真つ向から人間の尊厳をたやすく消し去ることができさる。

そもそも、あれ は何なのだろう。私をさらった人間は、あれ を神の使いと言っていた。あの詩によれば、あれ は太古から、英知を奪われて白痴になった魔王を慰める、いわば従者のような存在であると記されていた。あれ がいることで、魔王は無意味な破壊を行わず、異次元にある玉座にて永久に苦しみながらもこの宇宙を支配しているのだという。とすならば、醜悪な外見であっても、あれ は神の使いということになる。そんな存在に、はたして人間が太刀打ちできるのだろうか。

to be continued

1998/01/09

PM10:40Pj1

by P. TAKASHIMA

## 後書き

お待たせした。シュールなクトゥルフ小説『あれ』の続編である（フルート吹きながら喘ぐつちゆうのは、やっぱシュールリアリズムだよな、うん。俺って変態）。今回のストーリーは、筆者が思っていたほどに簡単なものではなく、おいそれと仕上げれるようなものではなかった。

今回の『声』は、前回のシュールなノリから一変して、見た目は比較的本物のクトゥルフ小説（なんじゃそりゃ）に近付けたつもりである。だから、からのシーンは（おそろく）ないだろう。それでも、ソレを楽しみにしていた人達以外は、楽しめる代物になったのではないかと思う（一話だけでなにを判断しろと……）。

さて、今回の『声』だが、実はかなりの難産もので、なかなか筆が進まない。俺の初モノ（と書くとは非常にやらしい）の『あれ』は、相当短い時間で書き上げた。好対称で、こちらには、様々な事情も鑑みたくしても、この一話を書いてから、二年の時間が流れている。イラストレーターの偉鷹氏からは、続きを書かなければならない、とせっつかれ、しかし俺の中ではまだはつきりとしたストーリーが見えてこない。加えて、様々な事故があり、

興がそげてしまった。書く気がおこらなくなったのである。まあ、それをこうして書いているのには、色々と事情があるのだが、とにかく、続編を期待してほしい。

前回出来なかった、俺の小説解説

クトウルフ小説の愛読者なら、このテの小説の続編が、一応にあるパターンでもって書かれていられることにお気付きだろう。

これは、オカルト小説全般に言えることだと思っただが、最初のストーリーで最初の謎を解き、次のストーリーでその次の……というふう書き連なれていく。その順序は、らつきよの皮むきなり、タマネギの皮むきなりを想像してもらえればわかるだろう。むいてもむいても、次の皮がでてくる、というアレである。つまり、オカルトの謎とはそういうもので、その奥にある真実は決して読者にはわからない作りになっているはずだ（だからこそオカルトなのだろう）。

今回、『声』では、その『謎の皮むき』の定石を、あえて外させてもらった。これには、様々な事情があり、ここですべてを書くことはできないのだが、まあ、気紛れと言おうか、何と言おうか。

今まで、色々な小説を相当数書いてきたが、それまでは小説のありとあらゆる定石と思われるものを書いてきた（つもり。実は違う。純文学と、推理小説、歴史小説は書いてない。他にも書いてない分野はあるかもしれないけど、イチイチおぼえてない。なはは）。そこで、ひとりよがりながら、実験をしたくなり、あえてその定石を外させてもらったというわけだ（そういう意味では、前作の『あれ』も裏技のオンパレードである。未読の人は読んでみよう）。

関係ないが、俺は、こうした定石破りを裏技と呼んでいる。小説書き出して三年未満の人はやっちゃいけないよ。大まかでもいいから定石を知ってからじゃないと、いざって時に（きつと）困るから（そういう人間を、俺は間違ひなく一人は知っている）。つまり、定石のストーリー運びは、同時に基本でもある（と思う）わけだ。基本は重要。

最後に

北は、北海道、道庁所在地の札幌に住んでいる（特に意味はない）俺は、本来クトウルフ小説を書いているわけではない。本人は、スベオベやサイバーパンクを書きたいし、そっちが本業だと思ってるのだ（しかし、現在書いている長編は、北欧ヴァイキングの復讐譚。足掛け五年でまだ未完。はう……）。まるで、まともと泉のようだ（わけのわからない人は、『きまぐれオレンジロード』のファンに聞いてみよう）。

ともかく、『声』が完結をみた時には、また別のジャンルを書くことと想っている。内容はまだ未定だが、この勢いは本物だ。期待してよじ？（とっとな）『声』を完結させようか。うむむ、御説ごもつとも）

てなわけで、今回はこのへんで。御粗末。

SEE YOU LATER!!

# 無限書房

---

## 声

1998,03,08 初版第一刷発行

著者 高嶋 P O N Z Z  
表紙・本文イラスト 偉鷹 仁  
装丁 無限画廊  
発行者 偉鷹 仁  
発行責任者 - 公園丸

連絡先

〒446  
愛知県安城市横山町下毛賀知 51-11  
中根方 公園丸

ホームページアドレス

<http://www.japan-net.or.jp/~itaqua>

落丁乱丁本はおとりかえいたします  
禁無断転写・転載

---